水上勉全集

23

水上勉全集　第二十三巻

昭和五十二年十一月　一　日印刷
昭和五十二年十一月二十日発行

著　者　水上　勉
発行者　高梨　茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七七

目次

海の牙　3
火の笛　259
あとがき　639

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海の牙

序章　猫踊り

陽がかげると、岩の巻貝が波打ちぎわに落ちこぼれた。

貝を拾っている子供は五人いた。中に女の子が一人まじっている。どの子も裸足だった。男の子たちは、汚れたメリヤスのシャツと、つぎはぎのある木綿のシャツを着ていた。みんながズボンの裾を膝までまくりあげている。女の子は赤いふるびたメリンスの着物だった。その着物の膝のあたりに穴があき、裏生地が見えた。女の子も裾をまくりあげ、その端を縄のように細くなった兵児帯にたぐりこんでいた。膝がしらの白い子である。やせているので、くるぶしがとび出ている。

どの子も、古い空罐や、角のまるくなった弁当箱をもっていた。磯波はゆるく、土色に陽焼けした子供たちのふくらはぎのあたりへ間断なく打ち寄せていた。

ビナと呼ばれているその巻貝は、田螺のような三角形の小さな貝である。子供たちは空罐や弁当箱にこのビナを拾いあつめていた。貝は家に持ち帰って母親の手で湯通しされる。それが夕食のかわりになるのだった。

四月はじめの海の風はなまあたたかく、水は冷えていたが、岩と岩のあいだや、砂浜へ入りこ

んでいるたまり水はぬるんでいた。
青い水苔のひかる岩の上に、一人だけよじ登って腰をかがめていた男の子が、とつぜん磯のほうを見て叫んだ。
「ウメコ、どげんしたと？」
その声で、水の中にいた子供たちはいっせいに砂浜を見た。さきほどまで水際にいたはずの女の子が、砂の上で、膝を組み合わせるような格好になり、前のめりに倒れる瞬間が見えた。
「ウメコ、どげんした？」
また、岩の上の子が叫んだ。
女の子は返事しなかった。砂に腹ばいになったまま、ざんばら髪を一、二度振るように動かした。髪の上に砂と水がかかり、チカッと光った。倒れた瞬間に、女の子はアルマイトの弁当箱をひっくりかえし、ビナがこぼれ出ていた。
「ふるえとるぞ」
別の男の子が水しぶきをあげて砂浜に走った。そして、倒れた女の子の顔をのぞくと、すぐ振りかえって叫んだ。
「猫のごつ、ふるえとっち……」
岩の子も、近くにいた子も、獲物入れの罐を胸もとにもちあげて女の子のそばに走ってきた。
「どぎゃんした、ウメコ」
背のたかい年長の子が、さしのぞくようにして顔を見た。膝がしらを砂にめりこませているウ

メコの裏がえしになった足が小きざみにふるえている。くちびるの色が紫がかっている。それが何度も大きくふるえた。ウメコは何か言いたそうだったが、声が出ないようである。そして、曲げていたその細い手をのばした。這いつくばう格好になった。膝のふるえはつづいていた。何か口の中で言ったようだが、はっきり聞えず、ウメコは上体をよじるようにくねらせた。うつむいたまま、手足をふるわせているのだった。

「腹が痛かじゃなっか」

そう言って年長の男の子は、また顔をさしのぞいた。急に、この子の顔色が変った。だらしなくあいているウメコの下唇から、涎が長く垂れおちるのを見たからである。白い水飴のような涎であった。ウメコのうつろな瞳孔は砂浜を見ていた。が、すでに視力がなかった。こぼれたビナ貝をウメコは砂にめり込ませながら手をつかえ、う、う、う、とかすかな呻きを訴えた。それから、やにわに涎の糸をひきながら這いだしたのである。

年長の子はへこんだ目をまんまるく見開いていた。が、急に踵をかえすと、半泣きの顔になって、崖上の村へ走りだしていた。

せり上がる傾斜の崖には、ところどころに黒い蜜柑の木が見られた。そこにトタンぶきの屋根を光らせた小さな家が、乳色の靄の中でかすんでいる。磯から崖に上がる坂道は九十九折になっていた。石垣と青草のはえた道が段々になって見え、その道を駆け登る子供の姿はみるみる小さくなった。空罐が子供の腰でおどり、遠くまでかわいた音をたてた。

子供はトタンぶきの家の前までくると、積みあげた茶色い石段を一気に飛びこえて叫んだ。

「ウメコが猫踊り病にかかったあ、お父つぁん、おっ母ん……」
母親は台所にいた。父親は母屋の隣の網小舎で地曳網をつくろっていたが、竹針をもったままちょっと子供のほうを見ただけであった。すでに母親は表に飛びだし、顔色をかえていた。
「おっ母あ、ウメコが大変だよッ」
母親は、せっかちに走る子供からおくれて小走りに歩いていたが、磯が見える地点にきて、遠くにむらがっている子供たちの姿を見たとき、急にやせた顔をひきつらせた。
ウメコはうす目をあけていて、手足を間断なくふるわせているばかりだった。ものが言えないのだ。
「ウメコ、ウメコ、ウメコ……」
母親は髪をふり乱し、汐焼けした手で少女の肩をしっかりつかんだ。はげしい痙攣がつたわってきた。やにわに母親は、うつ伏しているウメコを小脇に掻き抱いた。涎が長く糸をひき、母親の手に落ちかかった。
「ウメコ、ウメコ……」
絶叫する母親の顔は涙に汚れ、まっ青にかわっていた。突然、彼女は少女を抱き上げながら崖に向かって走りだした。母親の膝がしらが紅い腰巻を割ってむき出しのまま遠ざかって行った。
「お父、お父……猫踊りにかかったと、お父」
網小舎の中から父親が飛んできた。ウメコを抱きあげた。母親は敷居ぎわに手をつき、夫の足もとにしがみついて泣きくずれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おら、駐在へ行ってくっから」

そう言ってウメコを家の中の筵の上に寝かせた。その瞬間、ウメコは汚れた砂だらけの尻をまるだしにして筵の上をころげ廻った。やがて、くるくると宙がえりをはじめた。苦痛を訴える少女の目に、けもののような光が見えた。

トタン屋根の暗い下から、村の静かな空気をひき裂くような母親の泣きわめく声がいつまでもひびいていた。

九歳になるこの少女が、あとで「水潟奇病」といわれる原因不明の恐るべき第一号患者となった。

ウメコは、発病して十五日目に水潟市立病院で死んだ。死ぬ間際に、この少女は看護婦の制止する手をはねのけ、体を宙に飛びはねたり、くるくると反転させたりしたのち、悶絶した。

入院した直後、医者ははじめ日本脳炎ではないかと診断した。しかし、食物も水も受けつけない上に、手足や腰をふるわせているばかりで、手のほどこしようがなかった。すぐに極度の栄養失調になった。頭でっかちにオガラのようにやせ細ったウメコは、お玉じゃくしの尾のように足をふるわせて寝ていた。十五日目の朝がた、医者や看護婦が茫然と見ている前で、突然、起き上がると一時間ほど激しい癲癇ようの発作をつづけた。狂死したのである。

これは、猫の死にざまと似ていた。この地方には、昔から猫踊りというえたいの知れない病気が猫を襲っていた。魚や貝のくさった部分を猫が喰う。病気にかかると急に手足を痙攣させ、二、

三日目にやせ細り、地べたをころげ廻ったり、宙がえりをして狂死するのだった。どの猫も、うす目をあけたままで口からはげしく涎を垂らしながら死んでいった。

ウメコの場合、両親は日頃から顔色のわるい娘を気にして、あわびの腹わたを喰わせるのを日課にしていた。あわびの腹わたは薬だという習わしがある。父親は、家の者たちがビナや小魚を喰っていても、娘にだけはあわびを喰わせた。病気にかかる三日ほど前、ウメコは、朝飯のときポロリと茶碗を落した。一度持ちなおしたが、すぐにまた落としたのだった。麦飯がこぼれたので、父親は叱りとばした。その日、学校へ行きしなにも、ウメコは出口のところで草履がはきにくいと訴えていたが、いつのまにか出て行ったので両親は気にかけないでいた。その日、学校では一日じゅう運動場の隅にちぢこまり、ふるえていたという。しかしウメコは、帰ってからもこのことを両親に告げていなかった。

病院で狂死した少女の話は、尾ひれがついて恐ろしい病状の噂をうみ、部落じゅうにひびいていった。

「魚と貝に毒があるんじゃ。猫が喰って死によったが、人間もかかるようになったんじゃ」

この星の浦部落では、急に誰もあわびの腹わたを喰わなくなった。と同時に、漁師部落からあわび漁は消えたのである。あわびを買ってくれなくなったからだ。しかし、あわびだけに毒がまじっているというはっきりした根拠はどこにもなかった。ボラにも、チヌにも、伊勢エビにも毒がまじっているかもしれないのだ。この恐怖は、やがて、同病患者が続出するに及んで村の漁師たちを打ちのめしたのだった。

星の浦部落から約一キロほど離れた湾ぞいに滝堂という漁師部落があり、五月二十四日の朝、そこで大人の患者が出た。三十二歳の主婦であった。罹病して一ヵ月目に、彼女はカマキリのようにやせ、市立病院でウメコと同じ死にざまをした。猫同様に狂死したのである。

噂は大きくひろがった。「魚ば喰うと死ぬぞ」「魚に毒があるんじゃ」この主婦がいつも食べていたボラの刺身が、ついで部落人の食膳から消えた。

さらに患者は増えはじめた。滝堂部落の主婦が死んでから八月初めまでのわずか二カ月間に、星の浦に漁師二名、大工職が一名、滝堂部落に女が二名（うち少女一名）、米の浦に男一名、小学生が二名、どれもみな似たような病状になり、病院に収容された。

魚の毒が猫にだけうつるという見解は改めねばならなくなった。人間を猫踊り病にかける毒が魚の腹に潜んでいるのか。漁師は魚が売れないばかりでなかった、自分たちも、いつ病気にかかって狂死するかもしれなかったのである。

噂は部落だけの問題でなくなり、病院のある水潟市にひろがった。昭和三十一年晩秋のことである。

水潟市は熊本県と鹿児島県境にちかい海岸にあった。海は不知火の名で親しまれている八代潟である。市は県境の山系から流れてくる水潟川の河口にあったが、近辺には大小あまたの岬が海にむかって櫛目になって没していた。入りくんだ幾つもの小湾は、内海らしい落ちついたたたずまいで、波もあらくなかったし、いつも紺青の水が静かな山影をうかべていた。

市は工業都市である。しかし、目だった工場は一つしかなかった。東洋化成工業水潟工場というのがそれである。

工場は駅前の卵形になった広場から百メートル入った地点に、巨大な軍艦のような相貌で建っていた。硫安、塩化ビニール、酢酸、可塑剤などが生産の中心になっていた。そのうち、塩化ビニールが主力だといわれた。透明な風呂敷や汚れのつかぬテーブルクロスが繊維を革命したように、その原料である塩化ビニールはこの工場の伸展の原動力になった。水潟という小さな漁師町が、人口五万の市に昇格して周囲の漁師部落を併合したのも、革命といえないこともなかった。この事件の起きた年度は、五万の人口のうち約半数が工場関係労働者であり、この市の市民だった。

市の駅前に工場がデンと正門を構え、幾本もの高い煙突から黒煙が吐きだされている。空が灰色に染められている有様は、暗い気持の漁村とは反対に活気にあふれていた。市には、工場から出る化学薬品とカーバイドの残滓の臭いがそこらじゅうに充ちていた。それは、すえたようなすっぱい臭いであった。花粉のように舞いおりる石灰が家々の屋根瓦を灰色に塗りかえたように、この臭気は、どこの台所をも吹く風に溶けこんでいった。

市の背後は屏風のように三方から山がかこんでいる。緑濃い闊葉樹と針葉樹が豊かに茂っていた。岬もまた黒々とした樹林である。その岬が山ふところに入江を抱えこむあたりに急傾斜な断崖が見え、裾のほうには散在した漁民部落が見えた。漁師の家は、トタンや杉皮ぶきの粗末な小舎のようなもので、背中を向け合ったり横向きになったりして、まちまちに建っていた。奇病患

者の出た部落は、これらの漁民部落である。第一号患者の出た星の浦は、やはり市の地籍に含まれていた。

熊本市にある南九州大学の医学部に「水潟奇病研究班」というのが自発的にできたのは、それから半年ほどたってからのことである。星の浦部落を皮切りに増えだした患者は、大学病院へ入れられ、臨床的にも病理学的にも調査は開始された。病気の原因は、駅前にある東洋化成工場の排水口に近い湾に、ドベ（海底泥土）が三メートルも沈澱しており、その中に水銀が含まれ、このドベで汚染した海水中に棲息する魚介が有毒化しているらしいことがようやくわかった。排水口付近の漁民だけが奇病にかかるというのも、その証明の材料であった。

おどろいたのは東洋化成工場側である。そんなはずはない、日本に塩化ビニールの工場はほかにもあるし、水潟市にかぎって奇病が出るというのはおかしい、だいいち、十年も昔から湾に排水しているのに、今になって病気が発生している、何か他の原因だろう、と反駁してきたのだ。

この対立は病因が解明されていないために、今もなお続いている。病人は増える一方である。三年後の昭和三十四年秋には、患者八十名のうち二十九名が死亡するという事態になった。世間で問題にしはじめたのは、星の浦の少女ウメコが死んでから三年後のことであった。

第一章　不知火海沿岸

木田民平は、この水潟市内古幡の川ぞいの地で外科医を開業していた。彼はその年四十一歳、開業してから十一年目になっていた。

木田は二百二十ccのオートバイに乗って往診に行く。くぼんだ目と小鼻のふくれた顔に愛嬌があり、どこかぶっきら棒で磊落なところのある木田は、患者には受けがよかった。請われて彼は、水潟市がまだ町制時代からの警察嘱託医もかねていたし、学校にも関係していた。治療も親身だと評判がよい。しかし、いくら評判がよくても、町医者であるから繁栄は知れたものである。市には市立病院、工場には付属病院、その他種々の公共医療施設が整ってきだすと、木田の台所もそうぜいたくはできなかった。

二人の子供と妻静枝との四人暮らしである。よく働いた。玄関横の待合室にテレビがある。十畳の治療室には塗りかえた白壁と清潔なベッドがある。それらはすべて南向きの窓をうけて明るい。「木田外科病院」と書いた白地に黒のトタンの看板は、古幡の土堤の向こうからも見えるように、水潟川に沿った屋根の上に高々と掲げてあった。その看板は、本線の汽車の窓からも見えたし、橋の上からも見えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com